

近くて遠い日中関係

田中　まず国際社会の中での日本の選択といいますが、これは言葉をかえれば外交問題、国際問題になると思うのですが、その点からお尋ねしたい。当面の問題として日中の平和条約が、今進みつつありますが、大平さんはかつて田中内閣のときに外務大臣として、日中の国交回復に非常にご努力されました。今度の日中平和条約の締結は、それに仕上げをするということだろうと思いますが、これから日本が国際社会の中でどう進んでいくかということを考える場合に、日中関係を一体、外交路線の中でどのように位置づけるのか。

日本にとって日中関係は日米関係同様、非常に重要な一つの国際関係だろうと思うのですが、大平さんは今の国際政治の中で、日中関係あるいは中国という国を、基本的にどのように認識されておりますか。大平さんの日中観、あるいは中国観をお話いただきたい。

大平 中国と日本との間柄には、ちょっとユニークな問題があると思うのです。両国は近いようでしかも遠く、遠いようで近い、不思議な関係です。わが国は中国の文化の影響を受けておるけれども、日本は日本でまた独自の文化を育てていって、日中両国は全く違った国になっています。

田中 そうですね。われわれは、ややもすると東亜同文というようなことを強調してその同質性を指摘しますが、実態は非常に違います。その点の認識が欠けているのではないか。

大平 ええ、ところで両国は地理的にも近いし、文化的伝統にも共通のものがある。それで、これまでも日本は大陸との関係をどう取り結ぶかということが、常に大きな魅力ある課題でありました。それで多くの野心家がそれを試みたわけですが、大抵の場合失敗したようですね。

田中 朝鮮については神功皇后の三韓征伐以来、失敗の連続です。大陸についても大東亜戦争をみると失敗しています。中国を知っているという者に限って、失敗している。

大平 日中関係は成功の歴史よりも失敗の歴史の方が多かったんじゃないでしょうか。それでいてわれわれは中国とは疎遠になれなかつたんです。日本は、経済的にみると、むしろ太平洋を隔てて、アメリカとか、カナダ、豪州とかいうような国との関係の方が、大陸とのそれより深いのが実情です。資源の供給圏としても、製品の市場としても、また資本の交流面をみても、太平洋をめぐる国々の方が中国より、より近い関係にある。

経済的にみると、中国との関係は大事は大事だけれど、日米関係ほど大事ではない。しかし、そうはいうものの中国は、日本の隣りにある国だし、十億近い人口を擁した世界最大の国です。この国との関係の取り結び方というのは、日本の外交の最大の課題の一つであることはいまでもありません。外交の最大の課題の一つであるばかりでなく、日本の内政にとっても、日中関係は一つの大きな問題です。中国問題の内政的側面というのは、これまた非常にユニークなものである。

田中 よく中国問題は、同時に日本の国内問題である、日本の内政の問題であるというんですけれど、その具体的な意味というのはどういふ点にあるのでしょうか。

大平 それは、中国と真の意味で友好関係を持つべきであるという勢力と、そうではなく、ある意味で中国に対して覇権を確立しようという勢力が日本の国内に歴史的にありました。最近では、中国が不幸にして国共が二派に分裂し、国民党と共産党が、換言すれば、中華民国政府と中華人民共和国政府とが、中国の正統な代表権をめぐる抗争することになり、わが国もその選択をめぐる、国内に大きな亀裂ができました。ところが結局 “二つの中国” という道はないというわけで、日本はその一つを選択せざるを得なかったということです。

田中 二つに割れた中国が、日本国内に作用して核分裂を起こしたというわけですね。それはそれとして、ある人が、日本には北京派があり、台湾派がある。しかしいずれにしても相手は中国人であって、この中国人に対して日本人は非常に弱いといっている。つまり最近の政府の対中国外交をみて、わが国は北京に引きずり回されているといつて、批判をする人がいます。反対に日台関係をみて、今度は台湾側に引きずり回されているんじゃないかという声もある。どちらにしても、中国人に日本人は引きずり回されている。こういう批判の声がありますが、それは中国に対するコンプ

レックスが日本人にあるためでしょうか。

大平 いや、問題自体が非常に大きい。日中問題の持っている幅が広すぎて、アプローチの仕方がなかなか一つにまとまらないんです、相手が大きすぎて。

田中 なるほど。相手が大きすぎて、こちら側がまとまらない。確かにそういう点がありますね。

大平 日本人が中国人に対して弱いとか強いとかの問題ではないと思います。

田中 それからどうですか、日本の一衣帯水のところに十億近い国民がいて、それが日本と政治社会体制を異にする共産主義体制をとっている。その政治、外交姿勢など、見方によればかなりアグレッシブなところもなきにしもあらずである。そういうことで、非常に警戒を要するという意見がわが国の一部にあるわけですが、その辺は大平さんはどのようにみられますか。

大平 私は本当は、中国にそんなにくわしいわけではないので、権威をもっていう資格はないけれども、私の素朴な感じとしては、中国という国が対外的にアグレッシブであるという、そういう見方はとりませんね。

田中 なるほど。その基本的認識は、対中外交をすすめる上で大事なところだと思います。

大平 第一に中国の、ここ一世紀あまりの歴史は、西欧をはじめとして、日本など列強のいい獲物にされた。長い苦しいものであったわけです。つい最近になって、その中国が、そういう段階から初めて自主的な独立を勝ち取ったわけです。それは外に對して中国がアグレッシブなのではなく、むしろ国内のまとまりをつけて、外国からの干渉を排除していくかということに全力を挙げてきたのではないのでしょうか。そして共産中国はそれに一応成功したと言えるのではないのでしょうか。

それから第二に、今の中国は共産主義とか何とかいって居るけれど、これまた非常にユニークな中国のいき方であると思います。もちろん共産主義といってもソ連とも違ふし、中国流の一つの統治理念というものを持ってやってきた。それを毛沢東主義といふのでしょうか。共産主義とか何とかいうが、非常に中国的なものといつてよい。

田中 ソ連などの、いわゆるマルクス・レーニンズムの国とは違つていふわけですね。大平 そういう形式主義なものではないと思います。それから日本もあれだけの危

害を中国に加えた国だが、この加害者日本に対しても、とまかくまったく賠償を求めない。だから中国が、アゲレッシュプであるとは言えないですよ。むしろ他の国々が、中国の安全と独立と生存をどうして尊重していくかということ、真面目に考えていくべきではないかと思えます。

田中 過去の歴史をみても、たしかに日本は中国に対し加害者であった。そこでかなり加害者としての反省がありますね、戦後は。その反省がまた逆に行き過ぎて、中国に対して不当に卑屈になっているんじゃないか、という意見も日本にはあるんですが、大平さんは、そういうことはないとみられますか。

大平 まあ、加害者であったからそれを反省するということは、何も卑屈になるということは別で、ただ反省はあっていいんじゃないでしょうか。

田中 卑屈になる必要はないが、反省は反省として必要ですね。

大平 反省は大いにあるべきですが、むしろ私は最近の日本の風潮は、そうではなくて、加害者である立場と被害者である中国、わが国が中国に害を加え、中国が被害を受けたという、そういう日中関係を、あまりフェアにみていないと思いま

す。つまり、そういう中国が、日本と対等の友好関係を求めていることという点に對し、われわれは真面目に取り組むべきではないでしょうか。加害者としての反省が、むしろ足りない面がある。卑屈どころか、私としては逆な感じがしないわけでもない。そうでなければ幸いですけれども。

田中 それは非常に大事なポイントですね。

日米のワク内での日中

田中 それでは中国問題はそのくらいとして、日米関係に移りますが、戦後の日本は政治、経済、外交、すべての面で大体、日米関係を主軸にずつつとやってきたわけです。その基礎はサンフランシスコ講和条約によって成り立ったと思います。吉田内閣にしても、あるいは池田内閣にしても、日本の自民党政権の本流は日米関係を軸にして外交を展開してきたと思うのです。これは安保条約をはじめとして、経済関係においてもアメリカは、日本にとって最大の、しかも切っても切れない友好国家という

ことでやってきた。この路線の選択は正しかったと思います。

今、中国問題が出てきましたが、まず米、中、日という三国の関係を考えた場合、大平さんはこれからの三国関係をどのようにお考えになりますか。私などは三国はやはり一緒になって、協調路線というか、相協力してやっていくことが日本には必要なんだろうと思うのですが、米、中、日の三国関係のあり方をどう考えられますか。

大平 外交は観念論じゃない。戦後われわれはどういう路線を選択して、安全と生存を守ってきたかという現実的な基盤から、今日のわれわれは自由じゃないわけです。あなたがいわゆる、戦後は日米関係を軸にして、安全保障や経済の面はもとより、思想や文化なども嘗んできたと思うのですね。

私はそのような日米関係は、一部の極端な左翼を除いては大体評価され、支持もされてきたと思います。ですから、日中両国の国交を正常化するという問題は、この関係、つまり日米関係とフリクションを起こしたり、矛盾してはいけません。そのことを中国側も了解するし、アメリカ側も了解して、この三角関係が納まるころへ納まらないと何にもならんわけです。

そこで私も日中関係の正常化に取り組もうとしたとき、まず最初にアメリカへ行って、安保条約は堅持していくつもりだ、小骨一つも外すつもりはない、それは日本の外交の基軸だということをアメリカ首脳に伝えた。一方、われわれはそれをベースにして、日中の正常化ができるかできないかわからんけれど、トライしてみたいと言った。そうしたらアメリカは成功を祈るといっただけです。したがってわれわれは、アメリカの理解と支持を得ながら北京にいっただけですね。

安保条約とかサンフランシスコ体制とかは、中国にとつて、無縁なばかりではなくて、むしろ非常に敵対的な関係にあつたわけです。だからわれわれが安保条約を堅持しようという以上は、中国側はちょっとお相手にはなれない、せつかくだが国交正常化の話にはのれません、ということなのか、それとも、それはそれでわかった、日中関係を正常化する話し合いをいたしましょうか、その点が私にとって非常に心配であつたんです。

それで結局のところ、中国は日本が安保条約を堅持していても結構だ、それはそれでやりなさい、同時に日中は日中でやりましょうかということまで話がついたわけです。

だから日、米、中の三国関係をみると、日本の力点のおき方としては、まず安保条約があつて、つぎに安保条約と矛盾しないように、できれば日中関係を回復したいという事で努力し、それに成功したわけです。

対ソ世論は公正だ

大平 それからわれわれには日ソ関係がある。日ソ関係というものも、もともと安保条約とは無縁な関係です。しかし考えてみると、日米安保条約ができたあとに日ソ共同宣言がでてきているわけです。それは不十分な形ではあるけれども、日ソの関係は復交して、経済面でも、政治面でも、文化面でも、科学、その他スポーツ、いろいろな面で両国の関係は発展しました。だからこれは安保条約と両立をしている。安保条約という日米間のきずなを切らなければつき合わないとは、ソ連は言っていないんです。日ソ関係は日ソ関係として、ちゃんと矛盾なくやってきておるわけです。私ども自民党がやってきた外交路線というものは、米・中・ソともよどみなく、つまり全面

講和の方向に展開してきて、しかも成功しているということですね。

今、ソ連は日中条約の締結について何か不快の念を現わしています。ソ連が日中条約に不快の念を持つかどうかは、それはあくまでソ連のことです。われわれはこれからも日ソ関係を、親善友好のベースに乗せていこうということには、全然変わりはないわけです。日本は第三国、たとえばソ連を敵視するようなことはないのですから、ソ連としては何も気にする必要はないと思います。日本は自主的な道を淡々と歩いていけばいいんじゃないですか。

田中 “日・米・中”、あるいは“日・米・ソ” “日・中・ソ” の関係において、今、大平さんが言われたように結果としてみると、われわれは全面講和という線を着々実現しているんですが、一番やっぱり日本にとって問題なのは、中ソの対立で、その跳ね返りが日本にもきていることです。われわれの立場からいうと、北京も、モスクワも等距離外交であって、どちらかを差別する意図は全然ない。中ソどちらとも仲良くしたいと思っている。ところが向こうはなかなかさうはとらない。中国側もとらないし、モスクワの方にも、いろいろ雑音があるやに聞いております。それは、わ

れわれとしてあまり気にしないで、やはり所定方針通り邁進すべきだということですか。

大平　そうですね。それからちよつと私がわからないのは、日中条約とからんでソ連は本当に中国に抗議をしたんだらうか。日本ばかりに抗議をしないで、そういう懸念があるなら中国にも言ったらいんじゃないでしょうか。ソ連が日中条約について日本だけを抗議するようなことは、フェアじゃないと思うな。私どもはもっとフェアに、もっとオープンに、やっていきたいものだと思います。

田中　どうも日本の世論は、ソ連という国に対してはあまりよくありませんね。とくに一般大衆の次元における世論はそうです。これは第二次世界大戦当時におけるソ連のとつた態度に対する不信もあるでしょうし、さらに逆のぼつてみると、日露戦争時代からのロシヤに対する反感もある。スターリンの如きは、樺太をとりかえたのは日露戦争の仕返しをしたというようなことを堂々と発言して、日本の世論の反発を招いた。これは中国に対する日本の世論とは、非常に違つところだと思つ。

大平　私は別にそのようには思いませんが、ソ連に対しては、第二次世界大戦で日

本は加害をした覚えはありません。むしろ日本こそ、ソ連から被害を受けている立場にあるように思います。

田中 われわれこそ、ソ連から被害を受けています。

大平 その上に固有の領土も占領されており、中国の場合は、こちらが加害をした立場です。それにもかかわらず、最近の対ソ関係、対中国関係をみていると、日本の世論がソ連に辛くて、中国に甘いということはないんじゃないでしょうか。

世論は私、案外フェアでえらいと思います。

田中 世論は実態を正しく評価しているというわけですね。

大平 世論は、とくにソ連に厳しいというようなことは、別にないんじゃないかと思いますが。そういうソ連とも、われわれはちゃんと礼節をもって、おつき合いをしているんじゃないでしょうか。日本の世論はソ連に対して非礼なことなんか一つもしていないと思います。

ソ連は永遠の隣人

田中　そうですね、少なくとも日本側からはしていない。ところで最近のソ連の動きについて、たとえば日本海はもうソ連海になっていくんだとか、ソ連の海軍力が非常に増強されて大へんな力になりつつあるとか、いわゆるソ連の脅威を主張する向きがあります。大平さんは一体、ソ連という国をどうお考えになりますか。

端的に言って、日本にとり、やはりなかなかむずかしい国、ことによつたら非常に危険な存在になりうる国だというお考えをお持ちでしょうか。これはまあ、非常にデリケートな質問で、お答えにくいかも知れませんが。

大平　ソ連はまあ世界で最強の国の一つだし、しかも日本と国境を接している。つまり隣接している国ですから、この国とどういう関係を取り結んでいくかということ、日本の外交の最大の試練の一つです。しかしソ連がそばにおるから、そしてこれは大へんな脅威だから、日本は引越すか、といつても引越すことはできない。第一、引越すところがありません。(笑)

田中 引越しが効かんといいことですね、外交問題は。

大平 一億一千万の日本人を引き受けてくれるところは、世界中のどこにもないんです。だから永遠の隣人として、われわれはソ連とつき合っていくより、他に手がな
いんじゃないでしょうか。そして現にそのようにおつき合いをしているわけですね。
私はソ連もまた、日本との関係を改善しようと思っ
ていると思います。

田中 向こうもそうでしょうね。ソ連のおかれた立場を考えると、これまた当然です。
大平 向こうにとつても、日本との関係は、非常に大事なことです。シベリアの資
源といつても、日本との協力を抜きにしては、資源性など、ないに等しいとも言える
と思います。

田中 日本の経済協力を抜きにしては、シベリアの開発はできないでしょう。それ
は日本以上にソ連側もよく知っている。

大平 ソ連と日本は、やはり、きちんと手を握っていくのが一番いいんだというこ
とを、ソ連がもっともよく知っているんじゃないだろうか。そりゃソ連の武力はケタ
外れに強いけれども。

田中 武力ではソ連が圧倒的に強い。とすれば日本もソ連と手を握る以外ないというわけですか。

大平 だから、それと匹敵する武力を日本が持とうとしても無理です。

田中 これはとてもできません。またやるべきでもない。

大平 そんなことは無理だから、そういうことは一切考えないで、われわれは、今のまま、友好的隣人関係を営々として築いてゆけばいいんじゃないか。

田中 中ソの関係がずつつと対立状況にあります。これは特に毛沢東の時代に中ソ関係が悪くなったと思うのです。しかし毛沢東が亡くなられたあと、四人組も追放され、現在では鄧小平が出てきたわけですが、もう一度、中ソの関係がよくなるんじゃないかというような見通しも、米国の研究者などの間にはあります。アメリカあたりでは、そういう中ソ関係の改善を予想している人がおります。そうなった場合、日本はどうなるでしょう。中ソの対立は日本にいろんなマイナス面を与えていると思うのですが、同時にプラスの面もありますから。この問題を大平さんほどのように考えられますか。

大平 大事なことは、中ソ関係で日本が得するとか損するとかは考えないことです。中ソ関係は日本ではどうにもならんことだもの。

田中 こちらとしては、どうにもならない。またどうにかしようなんていう動きをすべきじゃない、という意見ですね。

大平 中ソ関係をどうにかしようなんていうことは、どう考えても無理だし、それに中ソの間のことですから、日本としてはあまり思い煩わないことです。わけ知り顔して、中ソ関係がどうのこうのと論ずるのはナンセンスです。

われわれは、日ソ関係を大事にすること、日中関係を大事にすること、それに最大限の神経を使ってやっていかねばならないと思いますよ。